様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2010～2014
課題番号：２２５２０２１４

研究課題名（和文）墓誌の表現分析に基づく日中文化交流の基礎的研究

研究課題名（英文）A study of culture exchange in Japan and China,based on studies of monument

研究代表者
廣川　晶輝（hirokawa, akiteru）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：４０３１２３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：　墓・古墳が持つ「顕示の機能、偲びの回路を開く機制」の分析から発展した本研究は、中国碑文や出土墓誌の表現が日本上代文学に与えた影響を解明し、日中文化交流の新しい道筋を明白にした。東広畑古墳(兵庫県神崎郡福崎町指定史跡)・東新田古墳(同)への臨地調査研究において両古墳の石室入口が古墳時代の集落跡「西広畑遺跡」の方角を向いており両古墳が集落への顕示性を具備していることを実証した。
　大韓民国における国際学術シンポジウムにて研究発表し、両国の相互理解・文化交流に貢献した。韓国国立中央博物館にて韓国葬送儀礼の資料を収集し、明白にし得た日中文化交流研究の道筋を、日中韓の三国間にも適用できる方途を発見した。

研究成果の概要（英文）：I have researched about a self-display of tomb.And in this study,I took a new turn.I study about culture exchange in Japan and China,based on studies of monument.And I have found a new route of culture exchange in Japan and China. In a research to HIGASHI-HIROHATA tomb and HIGASHI-SHINDEN tomb,I had positive proof of a self-display of tomb.
 I speached in international symposium in Korea.And I contributed to mutual understanding in Japan and Korea.And in korea,I found a new route of culture exchange in Japan and China and Korea.

研究分野：日本上代文学

キーワード：万葉集　墓　日中文化交流　墓誌　伝説　高橋虫麻呂　田辺福麻呂　大伴家持

１．研究開始当初の背景

(1)科研費交付による研究成果を踏まえて着想に至った背景

研究代表者廣川晶輝は、科学研究費補助金基盤研究（C）研究題目：「上代文学における墓の表現性についての基礎的研究」の交付を受け、研究成果として単著『死してなお求める恋心――「菟原娘子伝説」をめぐって――』（新典社、2008 年 5 月）を刊行した（この単著は新書であり、一般社会人の方々や生涯教育を志す方々など多くの国民に解りやすい表現にすることに努めた。この点、科学研究費補助金交付の成果の、国民への開示・説明のはたらきを十分に果たし得ている）。その研究過程で、本研究の研究課題に繋げるべき、下表の分析結果に基づく以下の結論を得た。

〔表Ａ〕

〈墓〉の機能	具　体　例
肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「よすが」	○昔こそ 外にも見しか 我妹子が **奥槨**（おくつき）と思へば はしき佐保山（『万葉集』巻 3･四七四） ○白鳥を獲て**陵域**の池に養はむ。因りて、其の鳥を覩つつ顧情を慰めむ（『日本書紀』仲哀天皇） ○彼の忠信を詠（しの）ひ、雷の落ちし同じ處に彼の**墓**を作りたまひ（『日本霊異記』雷を捉ふる縁）
第三者(他者)に対しての顕示･アピール･デモンストレーション	○大伴の 遠つ神祖の **於久都奇**はしるく標立て 人の知るべく（『万葉集』巻 18･四〇九六） ○碑文の柱を樹てて言はく「生きても死にても雷を捕へし栖輕が**墓**」といふ。（『日本霊異記』同上） ○長き代に 標にせむと 遠き代に語り継がむと **娘子墓** 中に造り置き **壮士墓** このもかのもに 造り置ける……（『万葉集』巻 9･一八〇九 高橋虫麻呂） ○長き世の 語りにしつつ 後人の偲ひにせむと 玉桙の 道の辺近く岩構へ 作れる**冢**を……（『万葉集』巻 9･一八〇一 田辺福麻呂） ○**奥墓**を ここと定めて 後の世の聞き継ぐ人も いや遠に 偲ひにせよと……（『万葉集』巻 19･四二一一 大伴家持）

〔表Ｂ〕

「第三者」によって現在まで語り継ぎ・言い継がれて来た「偲び」	○この道を 行く人ごとに 行き寄りて い立ち嘆かひ ある人は 哭にも泣きつつ 語り継ぎ 偲ひ継ぎくる……（『万葉集』巻 9･一八〇一 田辺福麻呂） ○いにしへに ありけるわざの くすばしき 事と言ひ継ぐ……（『万葉集』巻 19･四二一一 大伴家持）

「墓」は、〔表Ａ〕のように、肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「よすが」としての機能を持つ一方で、第三者（他者）に対しての顕示･アピール･デモンストレーションの機能をも持つ。第三者は〔表Ｂ〕に見られるように、この「顕示・アピール・デモンストレーション」に呼応して、死者に対する「偲び」を墓の前で語り継ぎ･言い継いだ。そして、このことで、本来ならば肉親にしか偲びようがなかった「墓に眠る人物」に対して、「第三者である我れ」も偲び・慕うことが可能となっているのである。ここに、「偲び」の回路を開き得る「場所」としての「墓」の機制を見定めることができるのである。という結論である。

研究代表者廣川晶輝は、墓自体が持つ第三者（他者）に対しての顕示・アピール・デモンストレーションの機能、および「偲び」の回路を開き得る墓の機制について、さらなる追究を試み、中国碑文や中国出土墓誌の表現分析をするに至った。なぜなら、碑文や墓誌は、墓に眠る人の生前の偉業や美麗な容姿を称揚する目的上、上記機能が最も顕著に発揚しており、第三者に対して「偲び」の回路を顕著に開く、極めて実体的かつ現実的な存在だからである。そして、廣川晶輝は、中国碑文の文言が日本上代文学の表現に影響を及ぼしている道筋を新たに明らかにした。その成果として、

> 廣川晶輝, 山上憶良作漢文中の「再見」小考, 甲南大学紀要文学編日本語日本文学特集, 148 号, 2007 年 3 月, pp. 1－13

を既にまとめている。その概略は以下のとおりである。

> 『万葉集』の歌人山上憶良の作品「日本挽歌」の前置漢文に、「再見」という表現がある。この「再見」と同じ用法の用例は一般の漢籍には検出できないが、中国唐で「國史」を監修し文化の中枢にいた武三思の「大周無上孝明高皇后碑銘并序」に見つけることができる。遣唐使の経験がある山上憶良であるだけに、当時の唐の文化の摂取を強く指摘できる。

研究代表者廣川晶輝は、科学研究費補助金交付による如上の明瞭な研究成果に端緒を得て、中国碑文や中国出土墓誌に見られる表現が日本上代文学の表現に与えている影響について、さらに解明し、日中文化交流の従来指摘されてこなかった道筋を明白にする本研究課題を、着想した次第である。

(2)「墓」をめぐる日中文化交流研究の重要性

日中文化交流に関する研究は現在でも重要な位置を占めており、「墓」をめぐっての文化交流も重要な研究課題であると言える。新聞報道（朝日新聞 2008 年 2 月 20 日朝刊）においても、この研究の重要性を看取できる。その報道では、

> 中国・山西省の太原市で 00 年に発見された北斉時代（550～577 年）の高級武官・徐顕秀（571 年没）の墓に描かれた壁画の全容が 19 日、九州国立博物館（福岡県太宰府市）であった研究会で太原市文物考古研究所の李非所長から報告さ

れた。人物像には、奈良県明日香村の高松塚古墳（7 世紀末～8 世紀初め）に描かれた男子群像と構図や持ち物など、そっくりな点が多くあり、日本の彩色古墳壁画の源流を探る手がかりとなりそうだ。

築造年代は高松塚古墳が100年以上新しい。北斉の出行図（被葬者の魂につきそう従者を描く意匠。廣川注）が後世の隋・唐に伝わり、それが日本へもたらされた可能性もありそうだ。

と報じられていた。この記事は、「墓」をめぐる日中文化交流研究の重要性を明瞭に示している。

２．研究の目的

上記のような研究上の背景に基づき、中国碑文や中国出土墓誌に見られる表現が日本上代文学の表現に与えている影響について解明し、日中文化交流研究の従来指摘されてこなかった道筋を明白にする。研究代表者廣川晶輝は、文部科学省に申請し交付を得た「平成 20 年度私立大学等研究設備整備費等補助金」によって「金石文研究の基礎的かつ必須図書一式」を既に整備することができている。整備されたこの中国碑文と中国出土墓誌研究の良好な環境を活用することで、また、平成19年度～21年度科学研究費補助金 基盤研究（C)「上代文学における墓の表現性についての基礎的研究」による成果を有効に活用することで、この目的を確実に推進する。また、日本上代文学の『万葉集』に収載される山上憶良の作品の表現の分析を継続し、日中文化交流研究を深化させる。さらに、墓・古墳の持つ「顕示・アピール」の機能、第三者の「偲び」の回路を開く機制の把握を、重層的かつ総合的なものへと深化させる。

以上が、本研究の目的である。

３．研究の方法

(1)中国碑文と中国出土墓誌の表現分析、山上憶良の作品の分析

上記のように、文部科学省に申請し既に整備できている中国碑文と中国出土墓誌研究の良好な環境を活用する。『石刻史料叢書』『新中國出土墓誌』などに収載される中国碑文や中国出土墓誌の文言の分析に立脚する。

また、「１．研究開始当初の背景」でも述べたように、日本上代文学『万葉集』の代表的歌人山上憶良には、遣唐使となって中国に渡った経験がある。そのため、当時の唐の文化を摂取した実体的様相を考察することが可能である。そして、研究代表者廣川晶輝には、すでに、下記の学術研究論文、

廣川晶輝,山上憶良作漢文中の「再見」小考,甲南大学紀要文学編日本語日本文学特集,148 号,2007 年 3 月,pp.1－13

において、従来指摘されてこなかった中国碑文の表現から日本上代文学の表現への影響の新たな筋道を明らかにした実績がある。このような実績をいっそう活用して、日本上代文学の『万葉集』に収載される山上憶良の作品の表現を分析する。そして、その具体的対象としては、和歌と漢文との一体化がはかられた形式、

漢文＋漢詩＋題詞＋長歌＋反歌

漢文＋歌＋題詞＋歌＋題詞＋歌……

が採用されている作品が載る『万葉集』巻５の諸作品が、必然的に選び取られる。

(2)墓・古墳の臨地調査研究

幹線道や航路の近くに築造された墓･古墳は、第三者に対しての顕示･アピールの機能、および、「偲び」の回路を開き得る機制が、極めて明瞭に示される築造物である。それらの臨地調査研究を行うことは、本研究課題を推進し、墓の持つ上記の機能・機制の総合的理解を深めるうえで、肝要であり必要不可欠である。ゆえに、幹線道や航路の近くに築造された墓・古墳の臨地調査研究を行うことで、既に成果を得ている、墓の持つ「顕示・アピール」の機能、第三者の「偲び」の回路を開く機制の把握を、重層的かつ総合的なものへと深化させる。

具体的調査対象として処女塚古墳（神戸市東灘区御影塚町）がある。吉本昌弘氏「摂津国八部・菟原両郡の古代山陽道と条里制」（『人文地理』33‐4、1981 年 8 月）は、古代山陽道の位置を推定した論考であり、その妥当性は、推定古代山陽道の線上にある「深江北町遺跡」（神戸市東灘区）から「驛」と書かれた墨書土器が出土したことによって、近年保証された（『深江北町遺跡 第 9 次 埋蔵文化財発掘調査報告書―葦屋驛家関連遺跡の調査―』、2002 年 3 月、神戸市教育委員会文化財課 に墨書土器の鮮明なカラー写真を確認できる)。この吉本氏論文の成果により、現存する処女塚古墳が古代山陽道のすぐ脇に築造されたことが証明されたのであり、『万葉集』に載る「葦屋處女墓を過ぐる時に作る歌」(巻 9・一八〇一～一八〇三、田辺福麻呂）の「玉桙の <u>道の辺近く 岩構へ 作れる塚</u>」という表現が、当時の古代山陽道と墓とが近接していた実態を反映した表現であることが証明されたのである。福麻呂歌には、墓の「顕示・アピール」の機能に応ずる「長き世の 語りにしつつ 後人の 偲ひにせむ」という表現があり、第三者としての「偲び」が開かれている。一方、森浩一氏「菟原処女の墓と敏馬の浦」(『万葉集の考古学』1984 年 7 月、筑摩書房）は、処女塚古墳が「瀬戸内航路を意識した位置に造営されていて、海からの目印のような造形物」であったと指摘した。その指摘は『西求女塚古墳　発掘調査報告書』(2004 年 3 月、神戸市教育委員会文化財課）によって補強されている。

吉本氏論文と森氏論文両論文の指摘は、矛盾するようではあるが、決して矛盾しない。処女塚古墳は古代山陽道と瀬戸内航路の両方に面しているのであり、陸路・海路ともに

「墓との出会いの衝撃」（大久保廣行氏「墓との出会い―伝説歌の底流―」、『筑紫文学圏と高橋虫麻呂』、2006 年 2 月、笠間書院）の極めて大きかった築造物であったのである。

ここに、墓自体が持つ第三者に対しての「顕示・アピール」の機能の存在、および、「偲び」の回路を開く墓の機制のあり方を明確に確認することができる。

研究代表者廣川晶輝は、神戸市教育委員会文化財課の協力を得てこの古墳の臨地調査研究を進めることにより、「墓」についての総合的理解を進め、本研究課題を重層的に推進する。なお、合わせて、東求女塚古墳（神戸市東灘区）・西求女塚古墳（神戸市灘区）への臨地調査研究を実施する。

４．研究成果

(1)中国碑文と中国出土墓誌研究の拠点形成および研究の発展を導いた実績

上記のように研究代表者廣川晶輝は、文部科学省に申請し交付を得た「平成 20 年度私立大学等研究設備整備費等補助金」によって「金石文研究の基礎的かつ必須図書一式」を既に整備することができている。この整備された上記の中国出土墓誌研究の良好な環境に加えて、『漢魏六朝碑刻校注 1－10 總目提要』一式などを購入し、中国碑文と中国出土墓誌研究の拠点形成に努めた次第である。

そして、この構築した研究拠点における中国碑文と中国出土墓誌が収載される書籍の精査、および、その表現の分析を地道に重ねた。その結果、以下のような成果をもたらした。すなわち、次の研究の段階への発展を導く、研究展開としての成果である。

中国碑文や中国出土墓誌等の金石文の文言が日本上代文学の表現に影響を及ぼしていることは、明瞭であるが、さらに、本研究「墓誌の表現分析に基づく日中文化交流の基礎的研究」の研究課題遂行上おこなった韓国の臨地調査研究において、重要かつ新たな分析点を発見した。

廣川晶輝は、2014年5月、韓国外国語大学校開校60周年記念日本研究所国際学術シンポジウム「万葉集に見る恋と死―あなたを歌うこと―」において、「万葉集の亡妻挽歌」と題して講演した。その際、国立民俗博物館への臨地調査研究をも実施し、葬送儀礼に用いる左のような「輓章」を発見した。棺を乗せた御輿の前に掲げ死者の生前を称揚するこの漢文体の輓章の中に、「哀哉」という表現で始まる輓章を見出したのである。この表現は、中国出土墓誌に頻出する慣用表現である。この頻出の慣用表現「哀哉」は、国内においても、台東区立書道博物館（東京都台東区）の本館に所蔵されている「王才及夫人毛氏墓誌」（唐麟徳元年(664年)）において、「嗚呼哀哉」というように見出すことができる。

韓国葬送儀礼の「輓章」

ところで、大韓民国国立民俗博物館での臨地調査研究において、輓章における「哀哉」という表現を発見した大きな成果は、決して偶然にもたらされたものではない。つまり、構築した研究拠点における中国碑文と中国出土墓誌が収載される書籍の精査を、日々重ねていた結果、その頻出慣用表現「哀哉」の理解が、研究代表者廣川晶輝の中に定着していたと思量されるのである。

大韓民国国立民俗博物館での臨地調査研究におけるこの発見は、次の研究への発展を導く研究展開としての成果と位置付けられる。つまり、ここに、「中国出土墓誌→韓国葬送儀礼の輓章」という影響関係を新たに発見したのである。

本科研費課題は「日中文化交流」であったが、次の研究展開としては、「日本―中国」の関係のみならず、「中国―韓国」、さらには「日本―韓国」の影響関係を分析・論述する確固たる素地を得たことになるのである。「中国碑文と中国出土墓誌の表現分析を基盤として、従来指摘されていない日・中・韓三カ国の古代の文化交流の様相を解明し東アジアの文化交流への理解を豊かなものにする。」という次の明瞭な研究課題、そして明瞭な研究方法の着想が、ここに必然的にもたらされたわけである。

(2)科研費研究成果公開促進費学術図書採択

「３．研究の方法」欄に記したように、研究代表者廣川晶輝には、中国碑文の表現から日本上代文学の山上憶良の作品の表現への影響の筋道を明らかにした新研究の実績がある。本研究においてもこの実績を活用して、日本上代文学の『万葉集』に収載される山上憶良の作品のうち、和歌と漢文との一体化がはかられた形式、

漢文＋漢詩＋題詞＋長歌＋反歌

漢文＋歌＋題詞＋歌＋題詞＋歌……

が採用されている作品を分析した。山上憶良は筑前国の国守時代に大宰府の長官（帥）であった大伴旅人とともに、上記の新たな形式を和歌史上に出現させたのであり、山上憶良と同様に大伴旅人の作品も分析した。そして、その結果を『山上憶良と大伴旅人の表現方法―和歌と漢文の一体化―』と題して、「科研費研究成果公開促進費 学術図書」に申請した。結果は、「採択」の幸運を得た。厳正な査読審査に合格できたわけであり、ここに、科研費交付のこの期間の研究成果の質が保証されたこととなる。なお、この学術図書の刊行は本年 2015 年 11 月であり、和泉書院より、同題の『山上憶良と大伴旅人の表現方法―和歌と漢文の一体化―』として刊行される。

(3)墓・古墳の臨地調査研究

幹線道や航路の近くに築造された墓・古墳の臨地調査研究を行うことで、既に成果を得ている、墓の持つ「顕示・アピール」の機能、第三者の「偲び」の回路を開く機制の把握を、重層的かつ総合的なものへと深化させる、という研究方法に基づく成果としては、次の諸臨地調査研究を挙げることができる。

①「八幡観音塚古墳」（群馬県高崎市）の臨地調査研究

この古墳は、墳丘の長さ105㍍、幅105㍍、高さ12㍍の古墳であり、6世紀末ごろ築造の前方後円墳である。この古墳の玄室天井部は推定重量55ｔの巨石であり、古墳南側を流れる碓氷川の7㎞ほど上流の地域から運ばれたものである。この点、古墳の舟運への「顕示・アピール」の機能を指摘できる。臨地調査研究においては、実際に現地を歩いての踏査を重ね、碓氷川河畔まで移動した。そして、この古墳を碓氷川河畔から実見できることを確認した。この地道な臨地調査研究によって、墓・古墳の「顕示・アピール性」を明瞭に確かめることができた次第である。また、この古墳は、当時の幹線道である古代東山道の近傍に建つ。当該臨地調査研究では、この古墳が古代東山道の方向を向いていることを確認できた。つまり、比定される古代東山道駅路からもこの「八幡観音塚古墳」がよく見えることが明らかとなったわけであり、舟運のみならず、幹線道路の交通に対しても、墓・古墳の「顕示・アピール性」が存在することを明らかにできたことの意義は大きい。

②「梁瀬二子塚古墳」（群馬県安中市）の臨地調査研究

この古墳は、西毛地域（群馬県西部）において最大の前方後円墳であり、築造は6世紀初頭である。なお、古代東山道がこの古墳の近くを通っていたと推定されており、古代幹線道路の交通に対する古墳の「顕示・アピール性」を調査することを目指した。当該臨地調査研究では、この古墳の東側２㎞のところに実在する、古代東山道比定地での現地調査もおこなった。この比定地では、幅10mほどの余剰帯が現在でも確認でき、これが古代東山道であると推定されている。そして、この古代東山道と推定される直線を西に延ばすと、当該の「梁瀬二子塚古墳」の近くを通ることが確認できた。ここに、古代東山道という幹線道に対して古墳が持っている「顕示・アピール性」を指摘できたわけである。

③「大内氷上古墳」（山口県山口市大内御堀）の臨地調査研究

この古墳は大内盆地に5世紀頃に築かれた前方後円墳である。全長約 28m、前方部の幅約14mの大きさを持つ。さらに、実際に現地を歩き臨地調査することで、この古墳が 80mの自然地形の山上に築造されていることを確認できた。古墳からわずか200～300mのところには大きな河川、仁保川が流れており、山上に築造されたこの古墳が舟運に対しての「顕示・アピール性」を大きく有する点を見出せた意義は大きい。

④「大仙古墳（伝仁徳天皇陵）」（大阪府堺市堺区大仙町）の臨地調査研究

著名なこの古墳は、墳丘の全長約 486m、後円部の径約249m・高さ約35.8m、前方部の幅約307m・高さ約33.9mの巨大な規模の前方後円墳である。当該臨地調査研究においては、この古墳の西側がすぐに海に向けて傾斜しており、当時の海岸線につながっていることを確認できた。海上交通からこの古墳がいっそう巨大に見えたであろうことを想定でき、墓が持つ「顕示・アピールの機能」を明確に確認できた次第である。

⑤「東広畑古墳」（兵庫県神崎郡福崎町指定史跡）「東新田古墳」（同）の臨地調査研究

両古墳は、石室の入口が古墳時代の集落跡「西広畑遺跡」の方角を向いている（『福崎町の文化財』、2004年10月、福崎町教育委員会･福崎町立神埼郡歴史民俗資料館）。また、福崎町公式ホームページ上の「東広畑古墳」解説にも、入口が西を向く古墳は珍しく、おそらく西にある西広畑遺跡に住んでいた人の墓ではないかと考えられる旨が記載されている(http://www.town.fukusaki. hyogo.jp/0000000302.html)。なお、下掲の臨地調査研究時の写真も参照のこと。両古墳の構造を考慮すれば、両古墳が集落への「顕示・アピール性」を具備していたことが想定できる。

東広畑古墳より西広畑遺跡を望む。

⑥臨地調査研究成果の国民の方々への還元

「菟原娘子伝説」が生成される基となった処女塚古墳（神戸市東灘区）・東求女塚古墳（同）･西求女塚古墳（同市灘区）の臨地調査研究をおこない、その成果を第 64 回萬葉学会全国大会臨地研究（2011年10月）において、日本上代文学研究者および一般の方々に対して報告し、遺跡の意義について解説することができた。これは、科学研究費補助金交付の成果を国民の方々へ還元する目的を大いに果たし得たものであり意義が大きい。

⑦臨地調査研究成果を社会・国民の方々へ発信した成果実績

研究代表者廣川晶輝は、神戸市教育委員会と連携をはかっており、神戸市総合インフォメーションセンターが把握していなかった「菟原娘子伝説」に関係する「生田川」の碑文の存在について助言を成した。廣川晶輝が成したこの助言は、すでに、国民の方々への情報提示において実際に役立っている。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕（計１４件）
①廣川晶輝、山上憶良と大伴旅人の作品を論じるための序説、甲南大學紀要文学編、査読無、165 号、2015、pp.1－7
②廣川晶輝、藤原宮の御井の歌、日本研究（韓国中央大学校日本研究所）、査読有、38 号、2015、pp.55－73
③廣川晶輝、笠金村「播磨国印南野行幸歌」について、美夫君志（美夫君志会）、査読有、89 号、2014、pp.42－55
④廣川晶輝、万葉集の亡妻挽歌―柿本人麻呂「泣血哀慟歌」の方法―、日本研究（韓国外国語大学校日本研究所）、査読有、61 号、2014、pp.61－80
⑤廣川晶輝、山上憶良「子等を思ふ歌」について、甲南大學紀要文学編、査読無、164 号、2014、pp.9－23
⑥廣川晶輝、大伴旅人「日本琴の歌」の〈趣向〉について―冒頭部分を中心として―、甲南大學紀要文学編、査読無、163 号、2013、pp.1－10
⑦廣川晶輝、柿本人麻呂「泣血哀慟歌」について―第一群と第二群の「やまぢ」の表記をめぐって―、上方文化研究センター研究年報（大阪府立大学上方文化研究センター）、査読有、14 号、2013、pp.1－10
⑧廣川晶輝、『万葉集』巻十三・三二四二番歌について―「久々利」と記す飛鳥池遺跡出土木簡と関連させて―、甲南大學紀要文学編、査読無、162 号、2012、pp.11－21
⑨廣川晶輝、継続と継承 平成二十一年 国語国文学界の動向 上代韻文、文学・語学（全国大学国語国文学会）、査読有、201 号、2011、pp.64－67
⑩廣川晶輝、山上憶良「貧窮問答歌」について、萬葉語文研究（萬葉語学文学研究会）、査読有、第 7 集、2011、pp.109－130
⑪廣川晶輝、家持作品の時間と空間、高岡市萬葉歴史館叢書（高岡市万葉歴史館）、査読有、23（大伴家持研究の最前線）、2011、pp.107－129
⑫廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」の題詞の「哀」について、美夫君志（美夫君志会）、査読有、81 号、2010、pp.42－57
⑬廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」の序文の「賞樂」をめぐって、国語と国文学（東京大学国語国文学会）、査読有、87 巻、11 号、2010、pp.63－79
⑭廣川晶輝、ふたりの壮士―高橋虫麻呂「菟原娘子伝説歌」をめぐって―、日本文学（日本文学協会）、査読有、59 巻、6 号、2010、pp.48－55
〔学会発表〕（計１３件）
①廣川晶輝、万葉第三期の空間把握―山部赤人「紀伊国行幸歌」を中心に―、平成 26 年度上代文学会秋季大会研究発表会、2014 年 11 月 30 日、早稲田大学（東京都新宿区）
②廣川晶輝、藤原宮の成立、韓国中央大学校日本研究所 2014 年度秋季国際学術シンポジウム「古都で歌に出逢う―うつろいゆく都」、2014 年 8 月 27 日、ソウル（大韓民国）
③廣川晶輝、万葉集の遠近法―笠金村「播磨国印南野行幸歌」について―、美夫君志会平成 26 年度 6 月例会、2014 年 6 月 8 日、中京大学（愛知県名古屋市）
④廣川晶輝、万葉集の亡妻挽歌、韓国外国語大学校開校 60 周年記念日本研究所国際学術シンポジウム「万葉集に見る恋と死―あなたを歌うこと―」、2014 年 5 月 31 日、ソウル（大韓民国）
⑤廣川晶輝、兵庫県の万葉集、美夫君志会掛合シンポジウム「兵庫県の万葉集」、2014 年 1 月 12 日、中京大学（愛知県名古屋市）
⑥廣川晶輝、柿本人麻呂「石見相聞歌」について、萬葉語学文学研究会第 38 回研究発表会、2013 年 3 月 24 日、関西大学（大阪府吹田市）
⑦廣川晶輝、明日香川に託した「恋の心」、美夫君志会掛合シンポジウム「飛鳥の万葉」、2013 年 1 月 13 日、中京大学（愛知県名古屋市）
⑧廣川晶輝、万葉の道を歩く 飛鳥・藤原京・平城京―空間・時間・人―、大阪府立大学地域文化学研究センター・上方文化研究センター・生涯学習センター主催 入江泰吉記念奈良市写真美術館共催「万葉の道を歩く」、2012 年 12 月 6 日、大阪府立大学（大阪府堺市）
⑨廣川晶輝、南大阪の万葉学、平成 23 年度大阪府立大学授業公開講座「堺・南大阪地域学Ⅰ」2011 年 10 月 27 日、大阪府立大学（大阪府堺市）
⑩廣川晶輝、八十一隣の宮、美夫君志会平成 23 年度 5 月例会、2011 年 5 月 8 日、中京大学（愛知県名古屋市）
⑪廣川晶輝、家持作品の時間と空間、高岡市万葉歴史館開館二十周年記念秋季高岡万葉セミナー「大伴家持研究の最前線Ⅱ」、2010 年 11 月 21 日、高岡市万葉歴史館（富山県高岡市）
⑫廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」の題詞の「哀」について、美夫君志会平成 22 年度全国大会、2010 年 7 月 4 日、中京大学（愛知県名古屋市）
⑬廣川晶輝、山上憶良「哀世間難住歌」について、美夫君志会平成 22 年度 5 月例会、2010 年 5 月 9 日、中京大学（愛知県名古屋市）
〔図書〕（計１件）
①廣川晶輝、和泉書院、山上憶良と大伴旅人の表現方法―和歌と漢文の一体化―、2015、384

６．研究組織
(1)研究代表者
廣川　晶輝（HIROKAWA, Akiteru）
甲南大学・文学部日本語日本文学科・教授
研究者番号：40312326
(4)研究協力者
具　廷鎬（KU, Chong-ho）
大韓民国中央大学校・ASIA 文化学部・教授